

寛文九年堂宇再建以來よりの事にて、元祿九年の地子町肝煎裁許附には、既に寶圓寺前(裏門前)と載せたり。

○三洞庵舊地

此の庵室は、寶圓寺の末にて、曹洞宗の尼庵なり。寶圓寺開山大透和尚以來の由緒を以て、寶圓寺の門前に庵室を建立し、庵主代々相續して住持たり。其の舊地は今云ふ裏門の近邊なりしを、堂宇破壊しけるにより、明治八年に天徳院の塔司小立庵の跡へ移轉し、于今相續す。裏門邊の舊地は、今裏門坂の道脇にありて、その遺蹟をいひ傳ふるのみ。

○三洞庵來歴

寶圓寺由來書に云ふ。利家卿寶圓寺建立被成砌、門前地之内に幻住庵と云ふ尼庵を取立、則開基三洞要玄と云ふ尼へ三百歩之地を賜る。三洞要玄と云ふ尼は、寶圓寺開山大透和尚の姉にて、大透和尚越前高瀬寶圓寺に住職之頃度々利家卿へ御目見致し、其節御兼約有之に付、右之通尼庵御取立、住持に被仰付。二代解心、三代正泉、四代理正、五代理聖とて、代々尼庵住職致し來る處、理聖之時代居屋敷拜領之御印物失却す。其節寶圓寺九代丹嶺和尚住職中に候

處、理聖願に依て、三百歩之内庵之門前拾二軒有之内六軒寶圓寺へ指出、庵修理致し吳候様に願に付、其以來寶圓寺より修理等致し、残り六軒は往々庵付に相成居たり。六代理榮、七代貞元、八代禪海と云ふ尼庵主之處、元文六年三月七日夜出火致し、古書等不殘燒失したり。九代を榮心と云ふ。寶圓寺十六代寂庵和尚之時、庵號指合有之、三洞庵と改稱す。寶圓寺開山和尚以來代々、毎年飯米支米一石宛庵主へ配當有之と云々。按ずるに、舊藩中僧侶は凡て寺社奉行の所轄なりしかど、三洞庵の尼は金澤町奉行の支配なり。又當國には從前石川郡横川の尼庵、宮腰の尼庵、河北郡三ッ屋の尼庵など、皆郡奉行の支配なりといへども、庵主中絶して連續せず。三洞庵のみは、開祖三洞要玄以來連續し、殊に庵地をも過分に賜はり、外の尼庵とは格別なり。故に明治五年戸籍編成の時、外の尼庵は悉く庵號を廢止せられしかど、三洞庵のみは其のまゝにて于今連續す。

○寶圓寺裏門前

改作所舊記に載せたる寛文八年四月十三日田井村肝煎の届書に、田井村領之内寶圓寺之谷麥畠に死人有之由、寶圓寺

門前之者共今朝申來。とあり。按ずるに、寛文九年寶圓寺再建の時寺門を改め、表門を裏門となしたれば、その前迄は寶圓寺門前と呼べり。元祿九年の地子町肝煎裁許附に、寶圓寺裏門前・同谷と載せたり。前顯の由來書に、三洞庵の門前十二軒有之内、六軒寶圓寺へ指出すなど見たる門前家は也。

○裏門坂

舊名寶圓寺谷といへり。此の谷の坂路は寶圓寺の裏門前より村木町へ出づる往來にして、谷間の坂路に小家を建てたり。變異記に、元文六年三月三日寛保と改元。同月七日夜亥刻寶圓寺谷門前地小家より出火。谷之内七十三軒燒失す。又寛保三年六月廿一日夜大雨。新坂町家損じ、寶圓寺谷家崩流四人死。と見え、又寛永二年七月六日・七日大雨、山ぬけ致し、寶圓寺谷一軒小修理谷一軒潰る。とあり。又寶曆七年五月廿七日・八・九日甚雨、寶圓寺谷損じ、寶圓寺庫裏も少々損す。といふ事など見たり。往昔は寶圓寺の山門此の坂路の方に建てありしゆゑに、寶圓寺谷と稱せしかど、寶圓寺再建の時山門を馬坂口へ建て、寶圓寺谷は裏

門口となりし故に裏門坂と呼べり。此の坂路は、いにしへ小立野の地、山崎山と稱せし頃のまゝなる幽谷にて、其の地景巖石岨ちて、谷川の流れ、雜木生ひ茂りたる風景、實に人跡絶えたる幽谷の樵道の如く、金澤市中の地景に非ず。故に文人雅客は其の地景を賞し、春は鶯の初音を待ち、或は時鳥の音信を聞きて詩歌を作れり。此の谷は百々女木の橋下よりつゞきたる溪にて、それより村木町へ出づるまでの谷間の風致は、實に其の地景信濃の木曾路に似たりとて、此の地を木曾谷と雅名す。故に明治廢藩置縣の際、金澤市中町名ども戸籍編成に付き改革せし頃、寶圓寺裏門前などの稱を廢し、彼の雅名に據つて、此の地邊を更に木曾町と町名を建てたり。

○馬坂

此の坂は、昔小立野山上の曠野なりし頃は、田井村の農夫牧童の草刈場にて、其の頃草刈の農夫牧童、馬を牽きて此の坂路を往來する岨坂なるに依つて、馬坂といひならはせしといひ傳へたり。此の傳説加邦錄・三州志等に載せたり。三州名跡誌には、寶圓寺前より天神町へ下る間六曲りな